

# 日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所  
162-0805 東京都新宿区矢来町 65  
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175  
発行者 総主事 司祭 矢萩新一

## 「いのちと平和・80年の秋」

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和です。」(ローマ 8:6)

日本の敗戦から80年目の秋を迎えています。毎年9月26日は、2013年に国連総会で制定された「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」です。私は現在、日本の宗教者が平和という1点で手をつなぎ協力し合う「世界宗教者平和会議(WCRP)」の特別会員として、「ストップ!核依存タスクフォース」という働きに加わらせていただいています。

80年前の広島と長崎、2011年の福島第一原子力発電所の爆発事故を経験した私たちは、「核といのちは共存できない」ことを、正義と平和委員会の原発問題プロジェクトの働きを通して、日本聖公会の立場として訴え続けています。原子力発電所の廃炉、核兵器禁止条約への批准と聞くと、政治的な課題だからと敬遠されがちですが、神さまから与えられたいのちを大切に、「神・人・世界の声に耳を傾ける」という宣教協議会からの呼びかけを大切にしようとする、日本聖公会につながる一人ひとりの信仰の課題として捉えたいと思うのです。

2025年1月発表の人類滅亡までの残り時間を象徴的に示す「終末時計」は真夜中まであと89秒とされ、核戦争や気候変動などの地球全体のリスクが、1947年の創設以来、最も終末に近いと示されています。他国への不信感によって軍備が増強される中、核抑止は危険を招く威嚇・脅しであって戦争を抑止するものではありません。また、記録的な猛暑によって原発の再稼働がよしとされつつありますが、原発は稼働してなくても電力は足りていますし、温排水によって海面温度を上昇させ、核のゴミは増え続ける一方でその処理の方法が定まっていません。アジア諸国を侵略したかつての戦争における加害の歴史や、核の平和利用という言葉でごまかされてきた、高いリスクを覆い隠す経済優先の過ちを見つめ直さなければならぬのではないのでしょうか。

## 口会議・プログラム等予定

(2025年9月25日以降・前回未掲載分)

### 9月

- 3日(水) 金融資産運用・管理チーム会議〔管区事務所+Web〕
- 8日(月) 祈祷書改正委員会〔Web〕
- 11日(木) 財政主査会〔管区事務所〕
- 11日(木) 祈祷書改正委員会〔Web〕
- 16日(火) 日韓協働委員会〔Web〕
- 17日(水) 日本聖公会第69(臨時)総会〔管区事務所+Web〕
- 27日(土) ナザレの家ウエハースボランティアの集い〔ナザレの家〕
- 30日(火) 第69(臨時)総会書記局会議〔管区事務所〕

### 10月

- 1日(水) 管区共通聖職試験委員会〔Web〕
- 2日(木) 管区事務所主事会議〔管区事務所〕
- 6日(月) 財政主査会〔管区事務所+Web〕
- 7日(火) ～9日(木) 人権セミナー〔横浜聖アンデレ教会・鎌倉〕
- 10日(金) 正義と平和委員会〔Web〕
- 13日(月) ～15日(水) 定期主教会〔名古屋〕
- 18日(土) 原発のない世界を求めるZoomカフェ〔Web〕
- 20日(月) ～22日(水) 日韓協働合同会議〔大田・ソウル〕
- 23日(木) 常議員会〔管区事務所〕
- 24日(金) 正義と平和・原発問題プロジェクト会議〔ナザレの家〕
- 27日(月) 収益事業委員会〔管区事務所〕
- 29日(水) 金融資産運用・管理チーム会議〔管区事務所〕
- 30日(木) ナザレ委員会〔管区事務所〕

### 11月

- 4日(火) いのちをみつめる祈りの集い〔Web〕
- 6日(木) 人権問題担当者会〔Web〕
- 7日(金) 教役者遺児教育・建築金融資金運営委員会〔管区事務所〕
- 10日(月) 年金委員会〔管区事務所+Web〕
- 10日(月) 日韓協働委員会〔Web〕

(次頁へ続く)

先日の第69(臨時)総会で、京都教区が伝道教区となることが承認され、来年2026年には北関東教区と東京教区が、2028年には北海道教区と東北教区が新教区設立を目指して協働しています。宣教体制の立て直しという大きな転換期を迎えて、種々のサイズダウンをしながらも、宣教の原点に立ち返って、本当に大切にしなければならないことを見つめ直す時なのだと思います。神さまと人々に仕える宣教共同体として、たゆまず祈り、イエスさまの弟子としてその血と体に励まされつつ、悩みながらもチャレンジを怠らず、これからも一緒に歩んでまいりたいと願います。



**公 示**

救主降生 2025年9月17日  
 日本聖公会 首座主教  
 主教 ダビデ 上原 榮正®

日本聖公会第69(臨時)総会決議第3号により、下記の通り管理主教を委嘱いたします。

**記**

日本聖公会法規第10条の2第2項により、2025年9月17日付けで、日本聖公会中部教区主教アシジのフランシス 西原廉太師に、日本聖公会京都教区の管理主教を委嘱する。

以上

**□各教区**

**中部**

- ・ 宣教150周年記念行事 2025年10月12日(日)～13日(月・休) 主教座聖堂名古屋聖マタイ教会
- ・ 第97(定期)教区会 2025年11月24日(月・休) 10時～ 【愛岐伝道区】主教座聖堂聖マタイ教会、【長野伝道区】長野聖救主教会、【新潟伝道区】三条聖母マリア教会

**□管区**

- ・ 2025年9月17日(水) 日本聖公会第69(臨時)総会 日本聖公会管区事務所他(オンライン開催) 総会決議事項：可決議案
  - \* 決議第1号(第1号議案) 新議員・新代議員歓迎の件
  - \* 決議第2号(第2号議案) 総会の議事運営に関する件

(前頁より)

- 14日(金) セーフチャーチ・タスクチーム会議〔管区事務所〕
- 18日(火) ハラスメント防止・対策担当者会議〔Web〕
- 27日(木) 女性に対する暴力を根絶するために祈る礼拝〔聖アンデレ教会・東京〕
- 28日(金)～29日(土) 各教区財政担当者連絡協議会〔ナザレの家〕

**<関係諸団体会議・他>**

- 9月10日(木) 日本聖公会婦人会新役員任命式〔川口基督教会〕
- 12日(金) 日本リスト教連合会常任委員会〔Web〕
- 10月1日(水) 日本聖書協会普及事業150周年記念式典〔カトリック関口教会〕
- 6日(月) キリスト者平和ネット運営委員会〔Web〕
- 9日(木) NCC 常議員会〔Web〕
- 13日(月) 中部教区宣教150周年感謝聖餐式〔中部教区主教座聖堂〕
- 15日(水)・16日(木) 日本キリスト教連合会法人事務・会計研修会〔Web〕
- 24日(金)～28日(火) WCC 第6回信仰と職制・ニケア公会議1700年世界会議〔エジプト〕
- 11月3日(月)～9日(日) USPG 人身売買などに関する国際会議〔インド〕

**京都**

- ・ 第124(定期)教区会 2025年12月6日(土) 9時～17時 主教座聖堂および平安女学院室町校舎

**九州**

- ・ 第122(定期)教区会 2025年11月23日(日) 16時～24日(月・祝) 15時 主教座聖堂および教区センター

- \* 決議第3号(第3号議案) 日本聖公会京都区が伝道教区となることを承認する件
- \* 決議第4号(第4号議案) 宗教法人「日本聖公会京都教区」規則変更を承認する件
- \* 決議第5号(第5号議案) 宗教法人「日本聖公会京都教区」規則変更を承認する件
- \* 決議第6号(第1号動議) 謝意表明の件(各教区事務所・教務所・教区センター、管区事務所、書記局、Web担当者)

## □神学校

### ウイリアムス神学院

- ・ 体験入学のご案内 2025年10月7日(火)～9日(木) 対象:満18歳(高卒)以上の方  
費用:18,000円(宿泊・食事込) 締切:9月29日(月) お問い合わせ:ウイリアムス神学院 〆 075-431-5406/FAX075-431-5445  
Email: info@williams-theol.com まで

## 聖公会神学院

- ・ オープンカレッジ 10月18日(土) 10時15分～15時 内容:公開授業、昼食、校内ツアー、礼拝 参加費:無料(但、昼食代1,000円) 締切:10月6日 お問い合わせ:聖公会神学院 〆 03-3701-0575  
Email: office@ctc.ac.jp まで



†逝去者 靈魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 ジャスティン・マーター八城昂一師(横浜・退) 2025年8月6日(水) 逝去(96歳)

司祭 マルコ垣内茂師(横浜・退) 2025年9月13日(土) 逝去(94歳)

司祭 ヨブ楠本良招師(京都・退) 2025年9月14日(日) 逝去(81歳)



やしろ さとる  
バジル八代 智 師  
日本聖公会  
神戸教区主教に就任



主教 バジル八代 智 師

2025年9月20日(聖霊降臨後第14主日の週の土曜日/秋期聖職按手節) 日本聖公会神戸教区主教座聖堂(神戸聖ミカエル教会)において、バジル八代 智 師の教区主教按手式および教区主教就任式が執り行なわれました。

説教者: 主教 イグナシオ入江 修 師

(日本聖公会横浜教区主教)



写真提供: 神戸教区

## 【日本聖公会第69（臨時）総会・寸描】

平日の夜、オンラインにて臨時総会が開催された。予定していた議員・代議員は全員が出席し、各会場を担った教区事務所職員・教務所・教区センター、Web担当者、総会書記局の協力により、総会は円滑に運営された。



日本聖公会第69（臨時）総会  
開会聖餐式の様子（於：管区事務所）

9月17日（水）18時より各会場において開会聖餐式がささげられ、全国11会場から主教議員8名（議長を含め9名の主教）、信徒・聖職代議員44名が管区事務所管理のZoom会議室に参集した。19時30分、松田浩書記長による点呼をもって議事に入り、準備された5件の議案および京都教区による感謝動議のいずれもが可決された。20時29分、議長の上原榮正首座主教による閉会祈祷ののち、一同主の祈りを唱え、入江修主教（副議長）の祝祷をもって総会は終了した。

今回の議案のうち特に重要とされたのは、第3号議案「日本聖公会京都教区が伝道教区となることを承認する件」である。本件は、2025年4月26日に開催された京都教区第122（臨時）教区会

において伝道教区への移行が可決されたことを受け、日本聖公会法規第128条の3に基づき総会の承認を求めたものである。採決に向け、大岡左代子司祭（京都教区聖職代議員）より教区再編への思いが語られた。それを受け、下条裕章司祭（東京教区聖職代議員）より、教区編成の動きの中で教区の主体性を損なわぬよう法憲法規整備の必要性等が指摘された。協議を経て採決が行なわれ、「京都教区が伝道教区となること」は、祝福の中で満場一致をもって可決された。

準備された全ての議案の協議後、京都教区より臨時総会開催に対する感謝動議が提出された。京都教区管理主教である長谷川清純主教より謝辞が述べられ、その中で京都事件に関する二次加害への言及がなされた。今回の伝道教区への移行は、前主教の早期退職を契機としつつも、新たな体制構築を目指す決定として承認されたと考えられる。総会の終盤において、上原議長より、中部教区の西原廉太主教が京都教区の管理主教として任に当たることが公表された。これにより中部教区と京都教区の新たな協働の道筋が示され、日本聖公会の将来における更なる展開を指し示す臨時総会となった。

### 第69（臨時）総会書記局

#### 書記長

司祭 松田 浩（横浜）

#### 書記

司祭 大山 洋平（北関東）

司祭 姜 暁俊（横浜）

執事 岸本 望（北関東）

執事 福永 澄（東京）

執事 藤田 美土里（東京）

（総務主事 アンナ 金子登美江）

## 《人事》

### 北海道

司祭 ピリゴ越山健蔵（東北・退）

2025年6月30日付 岩見沢聖十字幼稚園嘱託チャプレンの任を解く。

司祭 クリストファー永谷 亮

2025年7月1日付 岩見沢聖十字幼稚園嘱託チャプレンに任命する。

### 東京

司祭 ステパノ卓 志雄

2025年8月1日付 東京教区事務所総主事代務を命じる。

前澤弘之

2025年8月1日付 東京教区事務所総主事事務取扱を命じる。

**京都**

- 司祭 クリストファー・奥村貴充 2025年9月15日付 体調不良により2025年11月21日までの休養を命じる。
- 司祭 ダニエル鈴木恵一 2025年9月15日付 田辺聖公会の主日礼拝協力を委嘱する。(任期: 2025年11月21日まで)

**大阪**

- 聖職候補生 ステラ・ミシェル大倉有紀  
2025年9月13日 日本聖公会執事に按手される。

**神戸**

- 司祭 マルコ藤井尚人 2025年8月20日付 病気療養のため休養の申請を許可する。  
(期間 2025年9月30日まで)  
尚、休養期間中 療養のため赴任地を離れる  
場合がある事を認める。

**沖縄**

- 司祭 クララ咸 允淑 2025年8月31日付 北谷諸魂教会管理牧師の任を解く。  
司祭 ジョアナ・ホリス 2025年9月1日付 北谷諸魂教会牧師に任命する。

**特集 平和礼拝 2025**

《総合報告》 2025年平和の祈りから

**「広島平和礼拝」を終えて**

— 平和を実現する人々は幸い —

**広島平和礼拝実行委員長**

**神戸教区 広島復活教会 司祭 パウロ 竹内 宗**

思い起こせば20年前、中村豊教区主教の命により当時の宣教部長の原田佳城司祭と共に、たどりついたのはカトリック教会広島司教区、三末篤實司教様の執務室。その役目はカトリック教会広島司教区にご一緒させていただく平和行進と平和祈願ミサの調整を行なう事でした(現在、合同での平和行進、祈願ミサは行なわれておりません)。それから20年、教会の絶え間ない祈りと努力で、この平和礼拝は続けられてきました。

敗戦から80年、今年の広島平和礼拝は教区ではなく広島復活教会の主催で行なう事となりました。その理由は「原点」に返り、広島原爆犠

牲者の魂のため、また平和のために「静かに、落ち着いて祈りをささげたい」と言う、信徒からの要望でした。そもそも8月6日に行なわれる一地方教会の礼拝が、教区行事となり、西日本宣教協働区に關係する礼拝に加えられ、さらに教派を超えた管区レベルの行事となりました。残念ながらマンパワー不足や高齢化によって、お客様をお迎えする事が段々と難しくなっています。

とは言いつつも、広島に落とされた原子爆弾のむごさは想像を超えるものであり、ましてや決して人に向けて使うものではない事は明らかで、その実相をお伝えするのは広島復活教会の使

命。そのような事情を踏まえつつ、実行委員会は準備を行ない、以下のように進めてまいりました。

平和礼拝関連の行事は8月5日、6日と二日間の日取りで計画されています。主に、教会が主導するものと、諸教派で協力し合い運営するものがあります。初日の午後は復活教会で、近藤紘子さんに被爆証言をして頂きました(二回目)。お話しは、幼き時の記憶を紡ぎ合わせ、お父様の谷本清牧師(元日本基督教団流川教会)のお働き、ご自身の「B-29 エノラゲイ」の搭乗員との出会い。そして、広島・長崎のような被害を生まないために、戦争そのものをいかに防ぐかが問題であるとお話しくさしました。より詳しくは、この夏に出版された『ヒロシマを次世代に語り継ぐ』著・谷本清、近藤紘子(いのちのこば社)をお読みください。

その後、夕方には原爆供養塔前でローマカトリック・聖公会、今年から日本福音ルーテル教会も参加して「平和のための祈りの集い」が行なわれました。集いでは教区管理主教の入江修主教様にメッセージをいただき、原爆の悲惨さを招いたのはやはり戦争で、お互いをよく知らないが故に引き起こされる事を、み言葉を通して学びました。また、聖公会関係学校のみなさんに、心を込めて聖歌417番「あなたの平和の器にしてください」を奉唱していただきました。猛暑の中、事前学習に合わせて練習していただいたそうで、まことに感謝です。

翌日早朝、6時15分からは厳戒態勢の供養塔前でカトリック教会主催「原爆死没者供養行事」が行なわれ、これに出席し「献水」をおささげしました。その後、復活教会に戻り8時からは「原爆犠牲者逝去者記念聖餐式」が入江修管理主教と教区司祭団の共同司式で献祭、投下時刻の8時15分には一分間、教会の鐘を打ち黙祷をささげました。説教は、主題聖句である真福八端の一節から私がお話しさせていただき、会衆の大部分が学生さんでしたので、それぞれ自分の生活に帰ったら、この惨禍に集中した分、次は視野を広げて、様々な意見にも積極的に触れるようにとお勧めしました。

午後3時からは、超教派の集会「8.6キリスト者平和の祈り」(流川教会)に参加。日本原水

爆被害者団体協議会が2024年ノーベル平和賞を受けた時、オスロでスピーチされた小倉桂子さんの被爆証言を拝聴し、午後8時から供養塔で、プロテスタント諸派の集会「2025キリスト者平和の集い(証言者は小林貴子さん)」に参加しました。そして8月6日、広島の長い一日は、原爆ドーム前の灯籠流しでしめくられます。その光景を眺めながら帰途につき、改めて犠牲者の魂の平安を祈りました。

2025広島平和礼拝を終えた今、主催者の一員として課題と感じるところは、次の通りです。一つは、この礼拝と行事に使命感をもちつつも、小さな教会が担うには、とても大きな負担であること。すなわち何かを変えないと継続が難しい現実。二つ目は、被爆の実相を伝える方々の生の声を聞くことが、80年の歳月と共に難しくなってきた事。広島ではその危機感から、被爆者の証言を引き継ぐ若者が「被爆伝承者」となる活動が始まっています。三つ目は被爆から既に80年、そして平和礼拝をして20年たっても、現実を見れば未だ、何一つその危険性が回避されない事。それどころか、素人目に見ても危機は年々増している現実。これらの課題を踏まえつつ、この礼拝の「原点」である広島原爆犠牲者の魂の平安のために祈り、また平和のために祈る活動を続けることができれば「幸い」と思う次第です。



2025年 広島平和礼拝当日 灯籠流しの様子  
写真提供 広島復活教会 竹内 崇司祭

**pray for peace**

## 特集 平和礼拝 2025

## 「広島平和礼拝 2025 ～若い心に刻まれるもの～」

平安女学院中学校高等学校チャプレン  
京都教区 司祭 エレナ 古本みさ

今年も管区の平和宣教教育活動資金の支援をいただき、8月5～6日にかけて行なわれた神戸教区主催の「広島平和礼拝」に生徒たちを参加させていただきました。今回参加を希望した生徒は6名、加えて昨年度参加してよかったのもう一度行きたいという卒業生が1名ありました。本来の参加者のうち半数がリピーターです。過去には中1から高3まで6年間参加した生徒もいました。この広島平和礼拝の何が十代の彼女たちを惹きつけるのでしょうか。いくつかの思い当たる要素をこの限られた紙面ではありますが、ご紹介したいと思います。

まずは言うまでもなく、8月6日に広島を訪れることの重大さです。京都に暮らす生徒たちの多くは小学校の修学旅行で広島へ行き、平和学習をしています。しかしながら、8月6日の広島に流れる空気はまったく違うものがあり、そこで見るもの、聞くもの、そして考えさせられるものを生徒たちの心のきわめて奥深くまで届けてくれます。息をすることさえ苦しく感じられる一年で最も気温の高いこの日に原子爆弾が落とされ、地表面の温度が4,000度近くまでなったという事実は想像を絶することです。しかし、その場に立ち、突き抜けるような真っ青な空を見上げ、目をつぶり空気を吸い込むことで、感受性豊かな彼女たちの心は80年前に飛んでゆくようです。この感覚をもう一度覚えたい、まだ知らない人に知らせたい、そんな思いが彼女たちをこの地へ引き戻すのでないでしょうか。

二つ目は、5日朝広島駅に着いてすぐ、原爆ドームの周りで行われる核兵器廃絶を訴える署名活動の体験です。2008年に始まったこの中高生による署名活動は、広島女学院高校の生徒た

ちが中心となって行なわれ、毎年私たち聖公会関係学校も参加させていただいています。制服姿で二人一組となって署名用紙を挟んだバインダーとペン、そしてその趣意書を持ち、平和公園を訪れる人たちに直接声をかけます。最初はなかなか声を出すことができず、もじもじしていたら相手側から声をかけられることもしばしば。でも、時間が経つうちに私たちがびっくりするほど大きな声で、「核廃絶のための署名を行なっています!ご協力お願いします!」と叫ぶ様子が見受けられるようになります。年々増えている外国人の訪問者たちも立ち止まり、中高生たちの真剣な姿に感心し、やさしい英語で会話を交わしながら署名をしてくださいます。生徒たちはこの日、自分たちが世界の中心にいることを実感し、未来を担う一員としての責任感と平和への希望を胸にすることでしょう。

その後、平和記念資料館へ向かいます。入館者数が一年で最も多い時期で、展示を見るのもやっとなのですが、列がゆっくり進むことから、かえってじっくりと解説を読んだり、展示品を見入ったりすることができ、見学を終えて待ち合わせ場所へ戻ってくる生徒たちの中には目を真っ赤に腫らしている子たちもいます。

三つ目は、先にも書きましたが、他校の生徒たちとの交流です。毎年、関西の聖公会関係学校4校(プール学院、松蔭、神戸国際大学付属、平安女学院)のチャプレン、宗教主任たちが、事前に共通のプログラムを考えます。7月21日の海の日には、ひとつの教会に参加者を招集し、事前学習会を行なっています。今年は昨年度に引き続き神戸聖ヨハネ教会を会場としました。毎年そこへ広島女学院高校の生徒たちお二人を招

いて、核兵器をこの世界からなくすために自分たちにできることは何かという話をしてもらっています。短い時間ですが、ともに食事をし、ともに祈り、事前に互いを知り合うことで、実際にこの旅がどういうものになるのかに思いを馳せる機会となり、そして、広島で再会を喜び合うのです。今年は5日の夕方に原爆供養塔の前で行なわれるカトリック・聖公会合同「平和のための集い」で、関係学校の生徒たち33名が、事前学習会で練習した聖歌417「あなたのへいわの」を合唱したほか、夜には恒例となった広島復活教会を使わせていただいております。お好み焼きパーティーをしながら、身近なところで平和をつくるにはどうしたらいいかということについて思いを分かちあいつつ、

親睦を深めました。正直、この広島平和礼拝において生徒たちの心に一番残るのは、この同世代の人たちと行動し、平和を考えたという点ではないかと思います。こういう機会がいろいろなところでもっともっと始まることを願ってやみません。

このほかにも、近藤紘子さんによる被爆証言は何度聞いても心を打つものでしたし、6日の原爆投下時刻に合わせて行なわれた聖餐式はノンクリスチャンの彼女たちにも聖霊の息吹を感じさせるものでした。最後になりましたが、今年も広島復活教会の信徒の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 特集 平和礼拝 2025

### 《総合報告》 被爆 80 年 長崎原爆記念礼拝

- 「いのちを見つめる夏—長崎から世界へ」に出席して -

九州教区

福岡ベテル教会 クリストファー 山崎 洋

2025年8月9日、長崎は原爆投下から80年目の記念日を迎えました。前夜から線状降水帯が発生し、当日は大雨に見舞われましたが、多くの方が出席してくださいました。

西日本宣教協働区を構成する3教区が、今年も沖縄・広島に続き長崎でも共に集い、礼拝を捧げました。今年の司式は、7月5日に九州教区主教に就任された柴本孝夫主教と、上原榮正首座主教の共同司式。説教は、小林聡大阪教区主教でした。また、遠くは東京、大阪、神戸、沖縄各教区から聖職や信徒の皆様のお席がありました。礼拝の途中、11時2分の原爆投下時刻に皆で黙祷を捧げ、全ての被爆者の魂の平安を願い、献花をしました。

「神の遺産を受け継ぐもの」と題した小林主教の説教では、ご自身が今回出席された理由をお聞きすることができました。退職された松岡虔

一司祭から、阪神淡路大震災から30年、アジア・太平洋戦争終戦から80年に当たる今年、体調の関係で出席できないご自身に代わって、大阪教区から長崎原爆記念礼拝に出席者を派遣してほしい、と依頼されたことに始まります。松岡司祭は長崎で被爆されており、2018年の長崎原爆記念礼拝では被爆証言をしてくださいました。小林主教は、「戦後は来ていない、戦争は今も続いている」という松岡司祭の思いを受け取ったうえで、主イエスに「何を受け継ぎ、何を引き継いでいくのか？」と問われたら、「被害者にも加害者にも成りえる私たちが、命を担い合う者となっていくこと、と答えたい。松岡司祭ご夫妻の歩みを通して、現在進行形の痛みを共に担い合うことが、神の豊かさであることを学んだ」と話されました。痛みを担い合うことによって、痛みの遺産が神様の遺産に変えられることを共有したい、

との内容でした。痛みを担い合い、その思いを知ることが、平安につながる…大事なことだと思いました。

午後のプログラムでは、83歳になられた田中安次郎さんの被爆証言をお聞きすることができました。田中さんは、原子爆弾のさく裂した爆心地から約3.4km離れた、長崎市東部の新中川町に住んでいました。その日、自宅そばの路上で祖母、妹、近所のお友達と遊んでいたところ、突然ものすごい光を浴び、被爆されました。原子爆弾は、熱線と爆風と放射線を放出します。熱線による火傷、爆風による飛散物で受けた外傷、一番厄介なのは放射線です。放射線被ばくは体に受けた傷だけでなく、心にも、染色体にも深い傷を負わせます。75歳を過ぎると、染色体に異常が生じているといい、その影響は被爆者本人だけでなく、その子や孫にも影響を及ぼしかねない。そんな恐ろしい爆弾が、世界中に10,000発ある。その爆弾を1発ずつでも減らしたい、あのような悲惨な出来事を、戦争を二



田中安次郎さんによる  
被爆証言

度と起こさせてはならない、私たち被爆者が経験したとおそろしいことになりますよ、と伝えなくてはという被爆者の思いが証言活動の原動力であり、その思いが昨年のノーベル平和賞の受賞につながりました。今回の被爆証言を聞いた人たちが、平和のバトンタッチを受けて平和の使者となることが大切だ、と田中さんは話されました。平和とは何でしょうか？平和とは、なんでもない、当たり前、平凡な日々の連続です。でも、その平凡な日々を過ごせないでいる人々が、いま世界中におられます。その数を1人ずつでも減らすことが、私たちの使命です。長崎を最後の被爆地にするためにも、大切な働きとして続けていければと思います。



被爆80年 長崎原爆記念礼拝 集合写真  
写真提供 長崎聖三一教会 牛島幹夫司祭

## 国際典礼学会に出席して

中部教区

司祭 ダビデ 市原信太郎

去る2025年7月28日(月)から8月1日(金)までフランス・パリで開催された、国際典礼学会(Societas Liturgica)に参加した。聖公会国際礼拝協議会(IALC)が学究的な方向性から管区間ネットワークへと変化している状況を踏まえ、小生は2017年以来国際典礼学会(Societas Liturgica)にも参加して、学術的情報収集と人

のネットワーク構築を目指してきた。

今回の学会のテーマは「典礼集会とその空間(The Liturgical Assembly and its Spaces)」であった。カトリック、プロテスタント、正教会の5つの神学機関が協力して準備が進められ、パリ・カトリック大学(Institut Catholique de Paris: ICP)を主会場として行なわれた。

会議は、月曜日夕の会長基調講演から始まり、続いて会場を移動してノートルダム大聖堂で開会礼拝が行なわれた。今回のパリでの開催の一つの大きな理由は、2019年に火災で大きな被害を受けたノートルダム大聖堂の修復の記念である。毎日の朝夕の礼拝は、パリ市内各所の教会でエキュメニカルに行なわれ、非常に興味深い祈りの時間となった。

続く3日間の会議は、全体会である主題講演と、小会場に分かれて行なわれる参加者の研究発表とで構成され、会議の公用語が英仏独の三カ国語であることも相まって、実に多種多様な研究成果に触れることができる。小生が聞いた中では、「会衆席の神学：礼拝者の典礼実践」と題された、礼拝の実践的行為を分析的に調査し、実践そのものが身体化された礼拝者の神学であるというスウェーデンの研究者の発表や、様々な教派の若い世代が礼拝経験をどのように受けとめているかを、彼ら自身の語りと観察から明らかにしようとするアメリカの研究グループの発表などは、祈禱書改正という観点からも興味深かった。

3日間の基調講演は、毎日テーマが設けられ、「空間、集会、コミュニティ、文化」、「典礼空間と集会における歓迎、包摂、排除」、「聖と俗：再構成される空間」に関するそれぞれ2～3本の講演が行われた。一つ紹介すると、ブラジル聖公会司祭、リオデジャネイロ州立大学教授のルイス・コエーリオ氏は「(神の)都市への権利：典礼空間における分離を都市の比喩としてマッピングする」という講演の中で、自身の都市工学と神学という多重な専門性を生かして、「都市への権利」という概念を典礼空間にも拡張し、現代の都市が抱える格差や排除の問題が、教会の典礼空間にも同様に存在することを指摘し、神の王国の様を真に反映する包括的な典礼空間のあり方を考察するという、印象深い内容であった。

今回は、「日本聖公会改正祈禱書にふさわしい『空間』とは何か?」というタイトルで、小生も発表をさせてもらった。これまで聖公会祈禱書が想定してきた文化的環境とは大きく異なる現代の日本、そして未来の日本においてふさわしい、非言語的環境、という広い意味での「空間」に

ついて、現在考えていることを述べ、参加者のコメントを頂いた。

非信徒の大学生3名へのグループインタビューや、松本の幼稚園児が聖堂で礼拝をする様子などを例として紹介したところ、「これは、私たちとは全く異なる社会だね」という驚きも含んだ感想から、「共同の祈り」としてのリタジーの性格を再解釈すること、日本で受け入れられやすい文化的シンボルを導入すること、などが話題となり、大変参考になった。

2年ごとに開催される次回2027年の総会は、国際典礼学会史上初めて南半球に場所を移し、リオデジャネイロで行なわれることが発表された。この提案は、これまでの学会が主に北半球の先進国で開催され、ラテンアメリカやアフリカからの参加が困難だったことに対し、新たな声が発せられることを目的としているとのアナウンスがあった。このこともあって、ルイス・コエーリオ司祭は40代前半という異例の若さで次期会長に選出された。

Farewell Dinnerはセーヌ川のクルーズで行なわれ、プライベートな時間をほとんど持つことができなかつた今回の旅の中で、唯一観光らしい時間となり、川からのパリの街の景色を楽しんだ。

最終日は市内各所の見学ツアーが組まれていたが、再建にも関わったジル・ドゥルレーン師(ICP典礼高等研究所所長・本学会現会長)の案内によるノートルダム大聖堂見学に参加した。見学の中で、再建に関するエピソードが語られたのが印象深い。師は、聖堂内で共存する様々な時代の跡を指差しながら、「ノートルダムは古きを尊びつつ、常に新しくあろうとしてきた」と言い、今回の火災を機にサイドチャペルを「約束の回廊」として再定義し、旧約聖書の人物ごとのテーマでの展示に刷新すること、そのための新作タペストリーの制作が進むことに触れた。伝統を現代に継承するとは何か、その現場の説得力に圧倒された思いがあった。

この学会への参加は、これまでの三回と同様に、研修支援資金からの助成により可能となった。貴重な機会とご支援に、紙面を借りて感謝申し上げたい。

## CCA 国際協議会報告

### － アジアにおける強制移住・人身売買・サイバー犯罪増加との戦い － に参加して

東京教区 聖パウロ教会 牧師補 執事 アンセルム 林 汶慶

8月13から15日にタイのバンコクで「アジアにおける強制移住・人身売買・サイバー犯罪との戦い」に、日本聖公会を代表し、参加してきました。この協議会は、アジア・キリスト教協議会(CCA)の提言活動であるアジア・エキュメニカル移民アドボカシー・ネットワーク(AEMAN)の一環として開催されていました。協議会には、CCA加盟教会および評議会の代表者、国連薬物犯罪事務所(UNODC)、国際移住機関(IOM)などの国連機関、国際正義ミッション(IJM)などの国際NGO、市民社会団体、移民、人身売買、サイバーセキュリティの専門家など、35名の参加者が集まりました。

開会式では、事務局長は人身売買とサイバー犯罪は、アジアで最も急速に拡大している犯罪組織となっており、アジアの教会とエキュメニカル共同体は、市民社会、多国間組織、そして各国政府と連携し、人身売買と闘うためにあらゆる努力を尽くす責任があると、このテーマの概要と背景を説明し、三日間にわたる協議の方向性を示されました。

三日間にそれぞれ国連機関、国際NGOの関係者、移民、人身売買、サイバーセキュリティの専門家を招いて、14のセッションが行なわれました。それほどディスカッションできる時間もなく、協議会というより勉強会の要素が強いという印象でした。ここでは、主に教会に関わることを述べさせていただきます。

協議会では、アジアの教会とエキュメニカル共同体は、人身売買の撲滅への取り組みに貢献する責任を負っていて、この問題に取り組むためには、既存のネットワークを強化し、より広範なエキュメニカル連合を構築する必要があることを強調されました。そして、可能な限りあらゆる方法で、世界的な関心、圧力、そして対応を集

め、教会の預言的な声が政府に訴えかけ、権力を濫用したり、犯罪から利益を得たりするのではなく、保護のために使うよう強く促さなければなりません。また、宗教団体における役割も強調され、教会は被害者を支援するネットワークを構築し、支援を必要としている人々と適切な支援を提供できる組織やサービス提供者を結びつける上で重要な役割を果たすことができること、被害者支援に加え、教会は加害者の責任追及にも貢献し、人身売買業者や搾取者が正義から逃れないようにすることもできると述べられました。

二日目には、国連機関や国際NGOと連携する専門家たちは、アジアにおける人身売買、強制移住の新たな動向、そしてサイバー犯罪に立ち向かうための法的保護措置について強調されました。

協議会では、宗教団体が緊急支援の提供、被害者の帰国支援、そしてより広範な人身売買の対策活動への貢献において果たす重要な役割を強調されました。また、教会に対し、これらの危機への対応において、預言的、牧会的、そして教会としての役割を再考するよう呼びかけられ、教会は人身売買の被害を受けた人々に避難所を提供し、「聖域教会」となることができるのかも呼びかけられました。そして、聖書の物語からいくつかのモデルや事例から、教会の信仰と証し、そして被害者の脆弱な時に寄り添う司牧的な奉仕に基づき、人身売買や強制移住の被害者と連帯するキリスト教共同体の倫理的、人道的責任を強調し、この協議会の全体的なテーマに神学的な根拠を与えられました。

最終日には、アジア各地から集まった教会指導者、社会正義活動家、そして支援者たちが、草の根レベルでの活動にについて力強い証言を分かち合い、人身売買、強制移住、そして増加

するサイバー犯罪への対応における教会の取り組みの課題とチャンスを浮き彫りにされました。その中には、祈りの集いや困難に直面する家族への訪問といった牧会的なケア、医療、心理社会、教育を通じた直接的な支援、そして移民が自ら声を上げる場を創出する提言活動が含まれていました。

三日間の協議の最後に採択された声明では、教会に対して、移民と人身売買の被害者の保護、サイバー犯罪との闘いにおいて、積極的かつ断固たる役割を果たすよう促されました。そして、すべての人の尊厳と権利を肯定する聖書的・神学的考察、正義と慈悲を肯定する福音の

価値に基づき、教会に対し、会衆や地域社会における意識向上キャンペーンの実施、心理社会的カウンセリング、シェルター、食料、交通手段といった不可欠な支援を提供する活動の展開、さらに聖職者や信徒リーダーにあらゆる形態の人身売買や強制移住の構造的要因に取り組むためのスキルを身につけさせることを求められました。教会はまた、移民の物語を記録すること、訓練を受けたボランティアを組織的に動員すること、生存者主導の政策提言の活動を支援すること、そして宗教間の協力関係を築くことも強く求められました。

## CCEA アジア青年大会および主教会報告

— 8月27日～9月1日 マレーシア・サバ州・コタキナバル —

CCEA 常議員

京都教区 司祭 アンデレ 松山健作

2025年8月27日(水) から9月1日(月) まで、東南アジア聖公会サバ教区においてCCEA(東南アジア聖公会教会協議会)が開催されました。今回の開催は、4年に一度の青年大会と主教会を同地別会場で同時開催するという試みとなりました。私は2024年よりEXCO(常議員)を仰せつかり、主教会に同行させていただきました。

テーマは、「Focused and Faithful」でした。神に焦点を定め、忠実であることが意識されました。主教会では、各地域の報告とともに今回はミャンマー聖公会の状況についてフォーカスされており、特別に3つのセッションが設けられました。本来であれば現場のフィールドワークも設定されますが、今回はミャンマーの内戦、自然災害の上に祈る時間が大切にされました。

日本聖公会の報告としては、CCEA担当主教の高橋宏幸主教さまとご相談させていただき、①日韓聖公会宣教協働40周年記念大会、②災害支援として京都教区能登半島地震対策室の活動、③教区再編について東京教区と北関東教区の

事例を中心に報告をさせていただきました。東アジアにおける聖公会の教会は、信者数が伸長する中で、日本聖公会は減少の最中にあり、教区と教区の協働により新教区を設立する、また主教数も減少するという点については、驚きをもって関心が寄せられる部分でもありました。また能登半島地震に関する報告は、ミャンマーの内戦続く状況とは異なりますが、共通する状況もあることが確認でき、教会の継続的な災害に対する支援の重要性を感じました。

また今回は、青年大会と主教会が同地別会場で行なわれていたため、青年大会との合流プログラムもあり、青年たちの豊かな交わりを垣間見る機会も設定されました。日本の各教区から派遣されていた青年たちは、相互に交わることで大きな刺激を受け、聖公会の多様性を感じ、情報交換を楽しみ、自らの信仰について考え、共に歩もうとする姿が微笑ましく、また逞しく映る瞬間でした。日本聖公会から派遣された青年たちの準備したダンスも大盛り上がりで、引率として

青年委員会から参加された上平更司祭は、体力の限界に挑戦されながら、青年たちに混じってダンスを披露されました。



開会礼拝後の記念撮影

そのような雰囲気の中で行なわれた主教会の主題をかいつまんで紹介したいと思います。前述しましたように主教会では、ミャンマー聖公会のための時間が多く割られました。ミャンマー聖公会首座主教であるスティーブン・タン主教は、現在ミャンマーの状況について内戦が続く状況は、恐ろしい試練の中にあると表現されます。ミャンマーは内戦が続く中で、大地震と洪水で多くの方が犠牲となり苦難と困難が続いています。そのような中で「Focused and Faithful」という今回のテーマは、単なるスローガンではなく、私たちキリスト者の旅路そのものを表す言葉であることを強調されました。

「Focused」とは、イエスさまにしっかりと目を向け続けること。「Faithful」とは、神が約束されたことを必ず成し遂げてくださいと信じることを指します。ミャンマーでは、内戦が続き、現在も軍事政権による抑圧がなお続いています。すべてを失った人が多くおられ、大地震も重なり、多くの学校や教会の損失を経験しています。また将来のミャンマーを支える若者たちは、国軍への徴兵を恐れ、国外へと避難するケースもあり、将来への不安は募るばかりです。そのような状況の中で嵐の中を航海する船乗りが灯台の光を頼りに進むように、私たちはイエス・キリストの光に目を留める必要があるとタン主教さまはおっしゃいます。ペトロは、水上でイエスさまに目を向けていた時は沈みませんでした。けれども、目を

離した一瞬で沈みかけます。イエスさまに焦点を定めて歩むことの重要性を強調されました。

またタン主教さまは、続けて軍事政権の抑圧に耐えるミャンマーにおいて、中途半端な道を選ぶ余地は残されていないことを告白されました。苦難と困難が重なる最中で十字架の道を歩まざるを得ないとおっしゃいます。目まぐるしく変化する情勢の中で、恐れに屈することなく、十字架の道を選んで前進しなければならないとおっしゃいます。

しかし、そのような茨の道において、希望を捨てずに歩むことが原動力になると強調されます。希望があるからこそ、苦難に耐えることができ、私たちキリスト者の希望は、神の御手の中にあるのだということを忘れてはなりません。ミャンマーでは、多くの方が内戦で家を失い、家族を失い、度重なる地震や洪水により、喪失を経験しています。キリスト教や少数民族への迫害も続いています。そのような中であって、忠実な信仰を保ち、イエス・キリストに焦点を定めて歩むことにより、私たちは忠実なお方である神に迎えられるべきホームがあることを忘れてはならないとおっしゃいます。たとえ、ホームレスになったとしても、信仰者には「帰るべきホーム」があり、主イエス・キリストが復活されたことにより、私たちにも希望と喜びが共有されているのだと教えてくださいました。



ミャンマーの主教さま方を囲んでの座談会

タン主教さまは、世界のあらゆる危機の根源には、人間の本質的な「罪」が原因であると指摘します。それはわたしたち一人ひとりが抱えている「罪」から、アングリカンコミュニオンが直面している危機もその「罪」に起因していると指摘し

ます。アングリカンコミュニオンの場合、神の御言葉よりも議論や合意形成を優先してしまう傾向にあることは、大きな「罪」に陥る可能性があるとおっしゃいます。私たちは、危機に対して本当の意味で焦点を定め、忠実であるために働く聖霊の力を必要としており、ことにミャンマーではしっかりとイエス・キリストに目を向けながら前進するしかないことを教えてくださいました。ミャンマーの内戦、大地震、洪水に苦しむすべての方々の上にあらためてお祈りする機会となりました。ぜひ、日本聖公会においても各教会においてもあらためてミャンマーのためにおぼえてお祈りいただければと思います。

そのほか、主教会中にEXCO会議が行なわれました。CCEA開催のための予算の報告と共に、次回以降の開催場所についても確認がなされました。2026年日本、2027年台湾、2028年韓国という予定で開催されることとなります。翌年の秋

ごろでしょうか、日本でCCEA主教会を行なうということは急ピッチで進めなければならない事柄があります。まだ詳細については何も決まっていない状況ではありますが、お祈りいただき、私たちの教会もイエス・キリストを本当の意味で見つめ、東アジアの教会と手を繋いで歩む関係性が築かれますようにお祈りしています。

※ミャンマー聖公会には大地震の被害をおぼえて、高橋主教さまからCCEA開催中に支援金が手渡されました。



日本聖公会からミャンマー大地震への支援金を

## 2025 CCEA アジア青年大会参加報告

### 《総合報告》



#### 管区青年委員会 CCEA 担当 北海道教区 司祭 ノア 上平 更

8月27日から9月1日にかけてマレーシア・ボルネオ島サバ州コタキナバルにおいてCCEA（東アジア聖公会協議会）主教会と青年大会が同時開催されました。私は管区青年委員会CCEA担当者として各教区代表9名と共に青年大会に出席しました。CCEAアジア青年大会は2020年8月にフィリピン開催を予定されていたものがコロナ禍で無期延期となり、昨年10月ようやくフィリピンで開催された総会においてコタキナバルでの主教会・青年大会の同時開催が決定となりました。

決定から開催まで短期間での準備ではありましたが、各教区青年担当者の協力を得て、本大会参加に向けて事前に2回の準備会を開きました。準備会では、全聖公会の共同体について、東アジアにおける日本聖公会の位置付けや歴史

について西原廉太主教、小林聡主教より講義いただき、そして大会参加への激励メッセージを笹森田鶴主教からいただきました。過去参加者の小林真綾さんからも現地地で得た経験をお話いただくなど準備を整えることができました。

現地コタキナバルの空港から会場までの道のりは、8月31日の独立記念日を間近にしてマレーシアの国、州旗が代わるがわる至る所に掲げられていたことが印象的でした。宿泊・研修施設の「ココル・プレイヤー・サミット (KPS)」はココル・ヒル（標高平均568m）の山頂近くにあり、終日涼しい天気の中で大会が行なわれました。

最初の2日間は大会テーマである「focused & faithful」のキーワードについて2人の講演者 (Bishop Andrew Shie, Canon Dr. Lin Khee

Vun)によるセッション&ディスカッションがなされました。多彩な文化を持つ東アジアの国々の中で、キリストを中心に据えていくことの難しさを、ブルネイの現状（イスラム教社会にある教会の在り方）などを通して考える機会が与えられました。セッションの後は休憩時間に振り返りの時間を取り、通訳者として同席くださったサイモン・クレイさんから多くの助言をいただき、ディスカッションに備えることができました。様々なプログラムを通して交流を深められ、毎食のダイニングでは各国の代表青年たちがそれぞれに国を超えて食卓を囲む姿がこの大会の実りを感じさせるものでした。

参加青年たちは、初日の懇親会で日本聖公会の概要、震災支援、原発プロジェクトなどの取り組みや東アジア最初の女性主教が日本で誕生したことなどを紹介し、カルチャーナイト（各国の文化紹介の時間）では、青年たちが入念に準備し、浴衣や甚平を着て「アイドルダンス&ヲタ芸」が披露され、会場を大いに沸かせたことも印象的でした。



初日：日本聖公会参加者の集合写真

主日礼拝に訪れた現地教会では、ミャンマー聖公会マンダレー教区のデイヴィッド・ニイ・ニイ・ナイン主教ご夫妻も出席されており災害や政治的困難の最中にあるミャンマーの窮状を聞くことができました。当日紹介された写真や話の内容については事前にSNSなどへの配信をしないように配慮を求められており、現地の緊迫感が伝わるものでした。大会初日に管区から預けられた皆さんから寄せられたミャンマー聖公会への献金も無事にお渡し、心より現地の人たちの平安を祈りました。

本大会中忘れることができないフィリピンの参加者たちとの出会いがありました。2日目の夕食会の帰り道、私は彼らと乗り合わせて帰ることになりました。KPSまでの移動中、終始タガログ語や英語の明るい流行歌が響く中で、一人から「あなたはどこから来たの?」と尋ねられました。日本からだと言った後、彼女は何気ない日常会話の一言のように「かつてあなたがたの国は私たちの国を侵略したのよ」と言ったのです。私は時が止まったような感覚をおぼえました。彼らから見て、私は今も「国を侵略し同胞を殺した者の一人」という変えられない事実を痛感しました。しかし、それよりも驚いたのは「でも一緒に歌いましょう」と笑顔で言われた言葉です。

「赦す」という言葉を聞いたわけではありません。しかし「一緒に歌いましょう」と自分たちの輪の中へ私を招く言葉の向こうに主の招く手が見えたような気がしました。私は、聖歌418番「だれもひとりだけでは」をリクエストしました。原曲題はタガログ語で「応答」という意味を持ちます。私たちが平和を求める集まりであるならば、痛みや歴史や現実絶望するのではなく、その只中で私たちが繋ぎ止めようとしておられる主イエスの姿を通して、互いの物語を聴き合う心が与えられるようにと願わずにいられません。これからもCCEAの働きが多くの人たちの出会いと和解の現場となって続けられますように。

「わたしたちは生きよう平和を求めて。さあ世界の仲間と声を合わせよう」（聖歌418より）

## CCEA アジア青年大会に出席して

東京教区 東京聖テモテ教会  
フランシス <sup>ソ</sup>成 <sup>リン</sup> 縞

CCEAは東アジア聖公会の親交や協力を目的とした共同体であり、西洋の伝統をそのまま持ち込むのではなく、各国の文化に寄り添った形で宣教を展開することを重要視している。今回の青年大会では、各国の社会的・文化的背景

に触れながら、それぞれの文脈において信仰がどのように守られ、実践されているかについて議論する場面が設けられた。今年のテーマは、「Focused and Faithful」であり、無数の選択や誘惑にさらされる青年たちが、いかに神の語りかけに集中し、忠実に信仰を維持するかという課題に焦点が当てられた。

大会では、クチンのAndrew Shie主教が「集中(Focused)」について、サバのLin Khee Vun司祭が「忠実(Faithful)」について講義を行なった。Shie主教は、神は様々な方法で我々に語られるため、その声に気づくことが信仰に集中する助けとなると説いた。例えば、アブラハムやネヘミヤは疑問の中でも従順に歩み続けたのに対し、ペトロは風や波に気を取られ神を疑った結果、沈みかけた。集中は目的や方向性を明確にし、献身や忍耐を生む力になると強調した。雑音が多い現代社会で、いかにキリストを中心に据え、理解し、仕えるかが重要であると語られた。

一方、Khee Vun司祭は「共に留まる」ことが忠実であると語った。立法の本来の目的は神への忠実さにあるにもかかわらず、私たちはしばしば形式的な正しさにとらわれてしまう。司祭は結婚を例に取り、相手の欠点を理由に離れるのではなく、受け入れ、耐え忍び、共に成長することが契約の本質であると語り、神との契約においても同じ姿勢が求められると示した。

大会中の交流もまた、人々と「共に留まる」ことの実践であった。国境や文化的垣根を超え、互いに学び、尊重し合う姿が見られた中で、特に印象的だったのは信仰の自由に関する格差である。例えば、ブルネイとミャンマーはそれぞれイスラム教と仏教の力が強い影響で、キリスト教は差別や迫害の対象になっている。十字架の着用の禁止、教会の破壊、無実な聖職者の投獄等、非常に厳しい状況にある。ある国の主教のお話を伺う中で、プレゼンの写真撮影を控えるように念を押された姿からも、その過酷さが窺えた。日本で当たり前のように享受できる信仰の自由が決して普遍的ではないことを実感し、私がいかに現実を知ることの大切さを痛感した。

今回のCCEA青年大会を通して、集中と忠実というテーマについて深く学ぶと同時に、部分的

ではあるものの他国の仲間たちが直面する痛みや課題について触れることができた。更に、現地へ足を運び彼らの課題について直に触れ、より詳しく知る機会を設けたいという思いが芽生えた。この学びや経験を糧に、アジア聖公会の繋がりをより強めるために、自分が果たせる役割を模索していきたい。最後に、この大会の参加のために尽力してくださった太田信三司祭と高橋宏幸主教、事前事後のサポートをしてくださった新田紗世さん、現地で引率くださった上平更司祭に心より感謝申し上げたい。

## CCEA アジア青年大会に出席して

京都教区 京都聖マリア教会  
ミカエラ松本英里子

CCEAアジア青年大会に参加して、マレーシアのサバ州コタキナバルの山の上で各国から集まった青年たちと貴重な体験をしてきました。

CCEAのテーマである「Focused & Faithful」に沿って2日間主教からの講義を受けました。Focusedの講義では、聖書の例を示しながら神に「Focus」する(焦点を当てる)とは何か、焦点を当てるためにはどうすればよいのかについて話を聞きました。午後からの小グループでのディスカッションでは、様々な国籍の青年、聖職者を混ぜた10人ほどのグループで講義についての考えを分かち合いました。講義後のディスカッションでは、「なぜ信徒としてfocusが必要であるのか」や「focusするためには何が1番大切か」について話し合いました。講義の中で特に印象に残った言葉は、「神を一番先に入れなさい」です。この言葉は、瓶に大きい石と小石と砂をどのように入れれば溢れないかという物理学の話の例を上げながら、私たちは瓶を持っていてその瓶には容量がありその中に大切なものを入れなければならない、まず初めに神を入れれば他の全てのものはいるべき場所に収まるということを話しており、生きている中で忘れずに神に焦点を

当てるべきであるということと解釈しました。

Faithfulの講義では、シンプルなメッセージ「stay together」を中心に信仰深くあるためにはどうすべきかについて話を聞きました。神との繋がり、イエス様との繋がり、教会、人との繋がりを大切にして、分裂しそうな時は焦らず話し合いをやめないことが大切であるということ学びました。講義後のディスカッションでは、少し議題から逸れてそれぞれの教区の抱える問題を共有しました。日本や韓国では信徒の高齢化や青年の減少が主な問題としてあげられましたが、フィリピンのいくつかの教区では信徒が多すぎて教会側が青年を排除しようとしてしまうという日本とは全く違う問題がありました。

同年代の青年たちと交流する中でたくさんの気づきが得られ、自分たちの特徴にも気づくことができました。私は言語の壁を感じながらも様々な国の参加者と交流しお互いの文化や生活の話をすることができました。コタキナバルで出

会えた仲間は偶然出会ったわけではなく、神様が導いて巡り合わせてくださったのだと強く感じました。コタキナバルでの活動のどこを切り取っても大切な記憶です。この出会いが一生に一度で終わらないように、関係が続いていくようにしたいと感じました。コタキナバルで出会った青年たちと聖職者、また彼らの家族がいつも安全な環境にありますように、いつもお祈りしたいと思います。



2日目：夕食会での日韓合同集合写真  
写真提供 上平 更司祭



CCEA アジア青年大会 主日礼拝 集合写真  
写真提供 松山健作司祭

## 米国聖公会アジア担当幹事退任にあたり

米国聖公会 司祭 ブルース・W・ウッドコック

### 信仰において共に歩む

日本聖公会とのパートナーシップのもと、30年以上にわたり米国聖公会で奉仕し、前任者であり助言者でもあったピーター・ング (Peter Ng) さ

んの長年にわたる活動を経て、アジア太平洋パートナーシップ担当幹事を退任しました。私の歩みは、友情、証しの共有、そして世界中で聖霊の働きにまみえる喜びによって形作られてきま

した。この節目を、私が大切にしていきたいいくつかの思い出とともに一緒に祝いましょう。



ブルース司祭(左)・ピータ氏(右)

### 原発のない世界を求める国際フォーラム

2019年、日本聖公会により教会指導者が集められ、2011年の東日本大震災と津波の影響を目の当たりにしました。私たちは共に仙台と福島を訪れ、東北教区の磯山聖ヨハネ教会で追悼礼拝を行ないました。私にとってこの集いは、核兵器、放射能汚染、そして環境破壊によって未だに脅かされている世界において、教会はいのちと和解のためにしっかりと立ち向かわなければならぬという日本聖公会の決意を深く思い起こさせるものとなりました。



磯山聖ヨハネ教会祈りの庭(新地町)

### 未来のリーダー育成

(アジア太平洋地域における神学教育)

2023年に日本の聖公会神学院は、急速な社会変化の中で世俗主義や多元主義の現実に配慮し、信仰に根ざした教会指導者を育成するために、施設機能向上と現実に即した神学を進展させるために、学生と教員の交流や対面およびオンラインによるリソースの共有を通じて、聖公会の神学院や神学校間の協力を促進する聖公会神学校長ネットワークを主催しました。

苦難やリソースを分かち合う意欲は、私たちアングリカンファミリーの豊かさを示しています。

神学教育パートナーシップは、学術的なものだけではなく、キリストの慈しみと勇気を信仰共同体に伝える牧師を育成することにもつながります。



聖公会神学校長ネットワーク  
(聖公会神学院にて)

### 和解の絆

2024年に日本と韓国の主教たちが韓国の済州島に集まり、日韓聖公会宣教協働40周年記念と恒例の合同主教会を開催しました。つらい紛争の歴史を共有し、平和記念館で共に祈りをささげたことは、和解への決意を新たに作る感動的な場となりました。両管区の主教たちがキリストにおける一致を誓い合う姿は、深い感動を呼び起こすものでした。



日韓聖公会宣教協働40周年記念大会(済州)

### 旅路への感謝

これまでの出来事は、アジア太平洋地域における関係構築という、はるかに大きな物語の一部です。パートナーシップとは、決してプログラムだけではありません。互いに耳を傾け、学び、そして互いの中にキリストを見出すことです。聖公

会の15の管区(および中国)で、苦楽を分かち合い、それぞれのミニストリーに招いてくださった多くの同僚や友人に感謝しています。これらの友情は、日本聖公会と米国聖公会で私が働いてきた歳月に与えられた真の宝物です。

### 今後の展望

私は引退しますが、この移行を終わりとしてではなく、継続と捉えています。私たちが育ててきたパートナーシップは、より広大なキリストの体

に属するものであり、新たな形で継承されていくでしょう。預言者ミカの「公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と共に歩むことである。」との言葉は、これからも私たちを導いてくれます。日本聖公会は、平和のために働き、和解を求め、希望の共同体を築くことによって、この言葉がどのように生き生きと実践されるかを教えてくれました。そのことのゆえに感謝いたします。

2025年9月

## 「バイブルハウス東京」についてのお知らせ

＋主の平和

日本聖公会関連書籍販売代理店「バイブルハウス南青山」の店名は「バイブルハウス東京」と変更されました。問合せ電話番号・Fax 番号も変更されています。(ホームページ・メールアドレスの変更はありません) 年末のキリスト教書店(礼拝・一般)繁忙期に備え、以下のようにお知らせいたします。

旧)「バイブルハウス南青山」

⇒「バイブルハウス東京」

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18

TEL: 03-3203-4137 Fax: 03-3203-4186

E-mail: biblehouse@bible.or.jp

Shop: <https://biblehouse.jp/>

日本聖公会祈禱書・聖歌集ほか、聖公会関連の書籍をお求めの際は「バイブルハウス東京」に直接ご注文いただけますよう、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

日本聖公会管区事務所

総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一

大型判(A5判) 2,200円(税込)

ポケット判 1,200円(税込)

お求めはバイブルハウス東京  
☎ 03-3203-4137 HP: <https://www.biblehouse.jp/>  
またはお近くの書店まで



日本聖公会管区事務所  
2025年9月



### 📖 管区・出版物案内

#### ・『2026年度 教会暦・日課表』

2025年10月1日発行 頒価 300円(税込)

お求めはバイブルハウス東京 ☎ 03-3203-4137

またはお近くのキリスト教書店にお願いいたします。

## 日本聖公会各教区・教会の信徒・教役者のみなさま

主の平和をお祈りします。

太平洋戦争終結80年を迎え、日本での広島、長崎の原爆とそこで被災された人々を覚えて、米国聖公会ピース・フェロウシップが、8月10日主日での祈り、また学びと行動の呼びかけを作成してくださいました。心より感謝するとともに、核兵器の使用禁止を訴える平和への力強い呼びかけに勇気をもらいます。

日本聖公会の皆さまにもご紹介するとともに、米国聖公会への感謝の応答の文書を送付します。私たちの神の国は、神の支配の元に、平和の中にこそあります。

戦争や争いのない世界だけでなく、一人一人の尊厳と命が大切にされる神の国の実現にむけ、平和の器になりたいと願います。

広島原爆の日、広島にて。

日本聖公会首座主教 主教ダビデ上原榮正

日本聖公会主教会

-----  
**(米国聖公会への感謝の応答メッセージ)**

米国聖公会総裁主教 ショーン・ロウ主教さま  
米国聖公会平和連盟(ERP) 御中

### 広島と長崎の原爆投下から80年に際しての祈りと学びと行動の呼びかけへの感謝

+主の平和がありますように。

8月1日付で、広島と長崎のすべての犠牲者と被爆者を覚えて、戦後80年に際して平和のために祈る素晴らしい呼びかけをしてください、心より感謝申し上げます。

日本聖公会では戦後80年にあたり、4月20日のイースターに主教会から平和メッセージを發出し、6月23日の沖縄慰霊の日、8月6日の広島原爆の日、8月9日の長崎原爆の日を覚えてそれぞれの地で平和の祈りをささげました。

日本聖公会は、敗戦後50年にあたる1995年の「日本聖公会宣教協議会」において、日本聖公会の戦争責任を認め、その反省に立ち、歴史から学ぶこと、今も続く戦争や紛争、様々な差別や人権への取り組みを宣教課題とすることを確認し、1996年の第49(定期)総会において「聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議(決議第34号)し、アジア諸国への侵略戦争の反省に基づいて歩んできました。

そして特に今年は、「戦後80年～神と人と世界に耳を傾け平和をつくりだそう!～」というテーマを掲げて正義と平和委員会の様々なプログラムを展開し、8月15日には、日本聖公会と大韓聖公会の両聖公会主教会名で、互いを思いやりつつ「8.15日韓共同宣言」を發出しました。

また、2011年の東京電力福島第一原子力発電所爆発事故の経験から、日本聖公会は「核といのちは共存できない」という立場に立ち、すべての原子力発電所の廃炉と核兵器の廃絶を訴えています。

米国聖公会のみなさまとご一緒に、ウクライナやガザなどで多くのいのちが奪われている戦争・紛

争の停止を求め、一人ひとりの人権が守られる暴力のない世界を祈り求めます。また、金基理司祭の愛娘 Yeon soo Goさんの不当逮捕にも心を痛めつつ、その過ちが正されますように祈ります。

平和の君に従う者としての米国聖公会の諸決議と呼びかけに改めて感謝しつつ、ともに主の平和に参加する使命を担っていきたいと思います。

米国聖公会のすべての働きの上に神さまの祝福とお導きがありますように。

2025年8月9日

日本聖公会首座主教 ダビデ 上原榮正

日本聖公会主教会

-----  
(米国聖公会ホームページより)

[https://episcopalnewsservice.org/pressreleases/episcopal-peace-fellowship-calls-for-prayer-study-and-action-on-anniversary-of-hiroshima-and-nagasaki-bombings/?utm\\_source=ENS+English&utm\\_campaign=5750bea2f0-EMAIL\\_CAMPAIGN\\_2025\\_08\\_01\\_07\\_16&utm\\_medium=email&utm\\_term=0\\_5750bea2f0-136095649](https://episcopalnewsservice.org/pressreleases/episcopal-peace-fellowship-calls-for-prayer-study-and-action-on-anniversary-of-hiroshima-and-nagasaki-bombings/?utm_source=ENS+English&utm_campaign=5750bea2f0-EMAIL_CAMPAIGN_2025_08_01_07_16&utm_medium=email&utm_term=0_5750bea2f0-136095649)

(上記HP掲載内容 日本語訳：矢萩新一)

## 「米国聖公会平和連盟、ヒロシマとナガサキの原子爆弾投下から80周年に際し、祈りと学びと行動を呼びかけ」

2025年8月1日投稿、Facebook WhatsApp メール共有

米国聖公会平和連盟 (EPR) は教会に対し、アメリカ合衆国が広島 (1945年8月6日) と長崎 (同年8月9日) の原子爆弾と投下してから80周年を迎えるにあたって、記憶と懺悔、平和への新たな決意を呼びかけます。

私たちは、20万人以上の命が失われたこと、そして放射線被曝、トラウマ、そして環境破壊によって今も苦しみ続ける世代に深い悲しみを抱きます。また、このような惨劇を引き起こし、現在もなお世界の安全保障政策に影響を与えている、軍国主義、人種差別、ナショナリズム、そして支配への偶像崇拜といった根深い力についても認識します。

2022年、米国聖公会総会は、決議2022-C027を可決しました。これはもともと中央ニューヨーク教区のEPFイサカ地区支部から提案されたもので、「米国聖公会は核兵器の先制使用の選択肢を放棄し、国連の核兵器禁止条約で定められた核保有国間の検証可能な合意に基づく核兵器廃絶の取り組みを支持する」と宣言しています。以前の総会決議では、軍事予算が国家の優先事項を歪めていると非難し、平和、正義、そして人々のニーズへの緊急な取り組みを求め (2003-A025)、また「軍国主義はイエス・キリストの福音と相容れない (2006-D008)」と宣言しています。

平和の君に従う者として、私たちは核兵器が福音に対する真っ向からの冒涇であることを宣言します。キリストのメッセージは、暴力や支配ではなく、慈悲、連帯、そしてすべての被造物の癒しです。

---

この厳粛な追悼の時期に、EPFはすべての信仰を持つ人々に以下のことを呼びかけます。

ヒロシマ、ナガサキ、そして過去と現在における核暴力と軍事占領によって傷ついたすべての場所の犠牲者のために祈ってください。

8月10日の日曜礼拝で、「平和と追悼のための連祷」を用いることを検討してください。

核軍縮と脱植民地化に関する教会の教えを学びましょう。最近の総会決議や、数十年にわたる米国聖公会の決議も含まれています。その多くはEPFの冊子「Cross Before Flag」(PDF)にまとめられています。

### 行動として:

上院議員に、2025年7月16日に5人の米国上院議員が提出したS. Res. 323 (上院決議第323号)の共同提案を促してください。この決議は、米国が核軍備競争の抑制と後退に向けた世界的な取り組みの推進において主導的な役割を担い、他の核兵器保有国と協力してすべての核兵器の検証可能な廃絶を目指すよう促すものです。

軍事支出を住宅、医療、教育、気候正義など人間の必要を満たすために再配分する、道徳的な連邦予算を求めます。

EPFの非暴力と正義を推進する継続的なキャンペーンに参加し、世界中の姉妹平和運動と協力すること。これには、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエル・イラン戦争とガザ戦争、インド・パキスタン紛争、カシミール紛争など、現在の紛争において核兵器の開発と配備に反対する運動も含まれます。

ヒロシマとナガサキへの原爆投下から80年を迎えるにあたり、私たちは現在の厳しい現実を認識します。2025年の「終末時計」は午前0時まで89秒前とされており、1947年に原子力科学者によって作成されて以来、人類にとって最も高いリスクレベルです。核戦争の恐怖を記憶し、真実を語り、変革を促すために、キリストの愛と正義に基づく平和の営みに再びコミットしましょう。米国聖公会信徒として、私たちはどの国家よりも先に神の王国の一員です。真実を語り、勇気を持って行動し、平和の道を歩んでいきましょう。

---

### 聖公会平和連盟

「広島・長崎原爆投下80周年を記念する平和と追悼のための連祷」

(2025年8月6日および9日、またはその前後に、人々の祈りに代えて用いるために作成 連祷文言は日本聖公会管区事務所HPをご参照ください。)

---

## 原発のない世界を求める



# Zoom Caféのご案内

世界の声に耳を傾けよう

＜神が創られた自然・世界・社会＞



2011年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故は、多くの住民の生活や生業を奪い、長年住み慣れた土地やかけがえのない人間関係さえも破壊してしまいました。

この出来事によって、私たちは「核といのちは共存できない」ことを深く心に刻むことになりました。私たちは、原発のない世界を求めて祈り行動する者として用いられることを望んでいます。2ヶ月に1度（偶数月第3土曜日）のZoom Caféは、そのために学び、自由に語り合い、分かちあう場所です。参加申込、参加費は不要です。

好きな飲み物などをご用意して、Zoom リンクからお気軽にご参加ください！

## 2025年10月18日(土) 14:00~15:30

### 「台湾の脱原発とわたしたち」

お話：中道 雅史さん

(東北教区青森聖アンデレ教会信徒、核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会 事務局長  
大 MAGROCK / 大間原発反対現地集会実行委員会 事務局長)

二部構成でお話したいと考えています。5月17日、台湾はアジア初の脱原発を実現しました。その夜、午後10時の「第三原発」発電量ゼロへむけて、カウントダウン夜会が台湾電力ビル前で行われました。その場に居合わせ大きな感動を共有したものとして、また同時期に催された国際会議で発言させてもらったものとして、そして8月23日に行われた国民投票についても踏まえ、台湾行の報告をします。二つ目に、青森の話を中心に最近の反核情勢をお話できればと思います。

Zoom リンク：<https://onl.bz/UA3pSej>

ID：820 1414 1653    パスコード：822900



原発問題プロジェクト Web サイトの「Zoom Café」からもお入りいただけます。

<https://www.nskk.org/province/no-nuke-project/>



主催：日本聖公会正義と平和委員会 原発問題プロジェクト

お問い合わせ：090-1983-7244 (池住 圭)



日本聖公会

# 社会事業の日

2025年  
**10/26**  
聖霊降臨後第20主日 (務夜25)

喜ぶ者と共に喜び、  
泣く者と共に泣きなさい。  
(ローマの信徒への手紙 12:15)



**2025 ふれあいキャンプ**

ナザレの家

日時：10月12日(日) 16時現地集合  
～10月13日(月-祝) 16時解散

費用：全参加 5,500円  
参加費は20名まで、部分参加の場合は申込欄にてお会計金額を記入して下さい。

場所：日本聖公会「ナザレの家」  
〒181-0002 東京都三鷹市幸丸4-22-30  
主催：日本聖公会東京教区「障がい者」関連活動連絡会  
TEL: 03-6205-5531 [www.nskk.org/na-zare](http://www.nskk.org/na-zare)

お問合せ・お申込み(10月5日 まで) 締切  
連絡先 電話・FAX(03)6205-5531  
e-mail:byukai316@gmail.com

**申込書**  
(男・女)

お名前 \_\_\_\_\_  
ご住所 〒 \_\_\_\_\_  
生年月日 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日  
(所属加入のため、正確にお書きください。)

※参加費の現金は必ずお振替引込みと会計金額を記入して下さい。  
□参加費 5,500円 □お土産代 1,000円 □13日朝食 500円 □13日昼食 800円 合計 \_\_\_\_\_円  
※お断りが必要な方は必ず記入してください。  
□車いす参加 □手話通訳 □要約筆記 □ガイドヘルプ □その他( )

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/>  
 ☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。  
 comm-sec.po@nsk.kk.org 広報主事(鈴木 一) デスク宛て